笹山先生をお送りする

井上　勲

学生にとって、教師と助手とどちらが偉く見えるか、あるいは怖い存在であるのか、このことについて次のような体験がある。

六年か七年か前の春三月の頃かと思う、大学院後期課程に井上亘君が在学の頃である。文学部棟の二階の、つまり史学科が置かれている階の廊下を井上君と歩いていた。今日は寒いだとか暖かいだとか、梅は咲いたか桜はまだかいなだとか、埒もない言葉を交わしながら出口に向かって歩いていた。後ろから井上君との声がした。笹山先生である。

井上亘君は、ふぁーいと言ったような発声で、おもむろに振り返る。僕は礼を込めてハイの返答、そして直立である。井上君と井上と、亘君と勲との差は一に笹山先生との関係に出ていた。笹山先生は亘君にとって指導の教師である。僕にとっての笹山先生は、学生であった時代の助手である。

教養課程を了えて、専門課程は国史学科であった。時は一九六一年、いわゆる安保闘争のあった翌年である。威勢のいい先輩、といっても一年上の四年生が、新入生を集めて説明会を開く。図書の借り方とか研究室の使い方とか、そのような事務上の説明は一切ない。演説である。歴史研究の目的は歴史を解釈することではない、歴史を変革することにある、このような演説である。ついで教師についての批評である。あの教師は観念論であるとか、この教師は素朴実証主義だとかいった批評である。一通りの説明の後に、次のような注意があった。教授と対立することはよろしい、ただし、助手には反抗の態度を示さぬようにとの注意である。教師との学問上の対立は当然である、助手は学生の面倒を見てくれる、だから不遜な態度をとってはいけない。気宇壮大な演説から、一転して世故の話柄である。

一人が尋ねる、笹山助手はどのような人ですか、答えが返る、几帳面な人物である、これまでの歴代の助手は乱雑な人が多くて研究室は荒れるに任されていた、これが整理整頓されたのである。

僕が尋ねた。笹山助手は何を研究されているのですか、別の上級生の答えに曰く、チューエフを研究していらっしゃる。これが日本古代史であるとか、せいぜい古代兵制史と言うのであれば、まだし

も理解は届いたろうけれど、チューエフの音の響きは呪文のようであった。そのチューエフを研究している人であるから、恐ろしい助手なのである。

その経緯は今にふり返っても判然としないのだが、明治維新について卒業論文を書いた。だから、学問の上で、笹山助手から指導を仰ぐことはなかった。別になにかの面倒をおかけしたことも無かったように思う。もっとも僕の身勝手な思いこみで、そのように思っているだけかも知れない。

やがて笹山先生は助手を退職される。後任は大学院に籍のあった先輩でもあり、近世史の研究者でもあったから、助手というより尊敬すべき先輩であった。その意味で、僕にとっての助手とは、笹山先生ただ一人と言うことになる。

二十五年の星霜を経て、僕は学習院大学の教師であった。笹山先生が赴任してこられて、同僚である。笹山先生からすれば、僕は井上君から井上さんに昇格したことになる。ただし僕の意識の底には、チューエフの笹山助手の姿がうずくまっていて消えることはなかった。その意識が突如として顕現して、先の廊下の光景になったわけである。井上亘君のファーイに対して、僕のハイである。

そして、去年の三月の末のことである。懇意の医者に有無を言わさず血を抜き取られて、検査の結果は肝臓疾患あわせて重度の糖尿病で、入院加療を要するとの通告であった。長年の大酒の日々の祟りである。僕は主任の二年目だった。この年は史学科創立四十周年にあたっていて、お祝いの会が予定されている。編纂の専門委員長として『学習院大学五十年史』の完成も急がなければならない。新学期は始まることではあるし、入院などと呑気に構えるわけにもいかず、なんとか通院で許してもらうことにした。節制、とりわけ禁酒はもとよりである。

病状は好転しない。糖尿病の合併症で、足の末梢神経が痛みを増してきた。歩行はもとよりのこと座ることも難渋で、横になっても足に痛みの去ることはない。夏休みに入る前ごろに、主任の交代を申し出ることにした。

任期を残しての辞任は史学科には例がない。しかも、高埜さんは文学部長であるし福井さんは教務部長だし、他の教員は教務委員だの学生委員だのいくつかの委員を兼ねていて、繁忙を極めている。言い出しにくいことではあるが、足の痛みに耐えかねて辞任を申し出た。史学科には共同扶助の美風と伝統がある、我が儘は受け入れられた。

笹山先生が、残任期間を引き受けて下さった。そこで改めて思い出したのである。助手は学生の面倒をみてくれるのだから、よく言うことを聞くように、かつての先輩の言をである。ここに至って、笹山先生は再び助手であった。これからも、僕にとっての笹山先生は、古代史学の大家である以前に、チューエフの笹山助手でありつづけるのです。ありがとう御座いました、今後ともよろしくお付き合い下されば幸いです、ご迷惑はかけないように努力いたします。

ちなみに、チューエフは中衛府、『国史大事典』のこの項は笹山先生の御執筆で、「天皇側近の警護にあたる令外官。奈良時代の神亀五年に設置、（中略）大同二年の衛府制度の改革で、中衛府は右近衛府と改称され消滅した。」とある。